園長コラム～みんなが笑顔になれる保育園への道～　2025 年11月号

●急に肌寒くなり、駒沢公園の木々が赤や黄色に色づきはじめました。凛とした秋の空気に金木犀が爽やかに香る、溌剌とした季節の到来です。

●ふかさわミル保育園では10月10日に「ぐるぐるファミリーデー」（2 歳児クラス対象）、18 日には「みんなであそぼう～キラキラ、ミルミルランド」（3・4・5歳児クラス対象）が行われました。幸いどの学年もお天気に恵まれ、屋上での親子遊びを堪能できました。今年に限らず近年この行事の日は晴れることが多く、よほど園児か保護者さまの中に晴れ男・晴れ女さんが在籍していらっしゃるのか、はたまた皆様の日頃の善い行いの賜物か。いずれにしましても、今年も青空の下で運動会を開催できましたことを感謝申し上げます。









実に貴重な親子遊びの時間

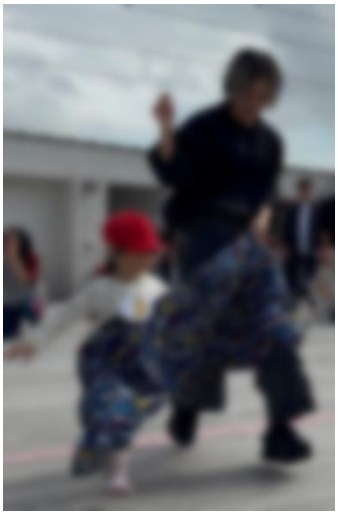
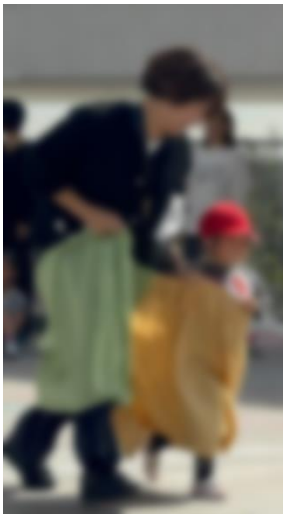
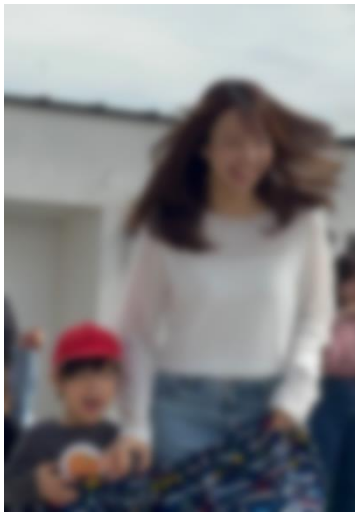
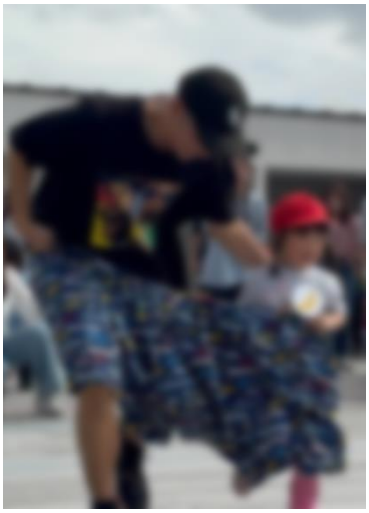
●さて、以前のお便りの中で「親がわが子と生涯で一緒に過ごせる時間はどれくらいあるのか」について取り上げました。某大学の研究によれば親子が生涯で一緒に過ごせる時間は、母親が約７年６か月、父親に至ってはたった３年４か月しかないこと。さらに保育園を卒園した時点で、既にそれぞれ全体の32%の時間が過ぎ去ってしまっているという、驚くべき内容でした。（詳細は過去のお便りを参照ください。）

●確かに私自身の子育て経験からも、子どもが小学校に進学して以降は、子どもと一緒に体を動かして遊んだり、スキンシップを図る機会は激減します。学校行事を介して集団の中でのわが子の姿を目にすることはあっても、次第に子どもの方から親に見られることを恥ずかしがったり、友達の前で親と手を繋ぐことを拒んだり…。それはそれで、子どもの大事な発達過程なのです。しかし親にとっては、ある日突然訪れる、寂しさを感じる瞬間でもあります。

●そう考えると、親として子どもと触れ合い遊び・運動遊びを純粋に楽しめる期間は、案外保育園に在籍している間だけなのかもしれません。こうしたことも踏まえて、ミル保育園の運動会は、前半のサーキットの時間に加え、屋上での親子遊びの時間を後半に設けています。運動会の名前を「みんなで遊ぼう」と称しているのもこの趣旨です。

●ご参加いただいた保護者様には共感していただけると思いますが、親子遊びに興じている時の子どもの表情といったらもう、キラキラしています。もちろん普段も子どもたちは笑

顔で過ごしているのですが、お父さん・お母さんと遊んでいる時の笑顔はまた格別です。こうして当たり前のように過ぎ去っていく親子の時間や距離感が、やがて青年に成長していく子どもにとって宝物のような思い出となり（それは親にとっても同じですが…）、いつまでも記憶に深く刻まれること。そんなことを願い、毎年職員と一緒にその年の子どものブームを踏まえながら楽しい企画を考えています。

（註：紙面スペース及び撮影タイミングの都合上全てのご家庭の写真を紹介できず申し訳ありません…。ぜひ後日販売されるルクミーフォトをご覧ください）

サーキットと昔ながらの運動会の違い

●ご承知のとおりミル保育園の運動会はサーキットという運動遊びの形式を取っており、かつて私たちが子どもの頃から経験してきたような、かけっこで順位を競ったり、チーム一丸となって優勝をかけ勝ち負けにこだわったりという要素が見当たりません。なぜなのか。その理由についてご説明します。

●それは、まずは何よりも子ども一人ひとりが、発達のペースに合わせて運動遊びの楽しさを体感し、生涯にわたり体を動かすことを好きになって欲しいと願っているからなのです。

●人間は、本能的に自身が成長する機会を欲し、成長を実感

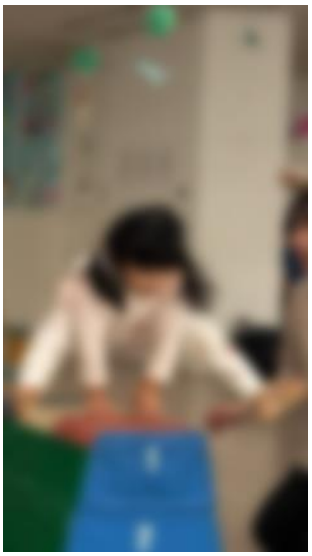
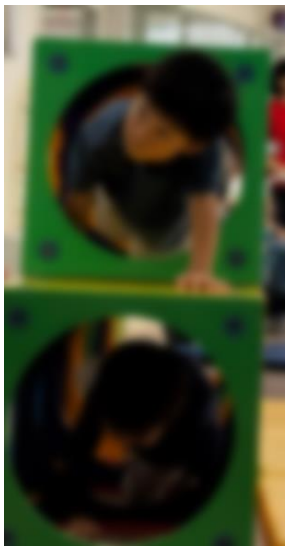
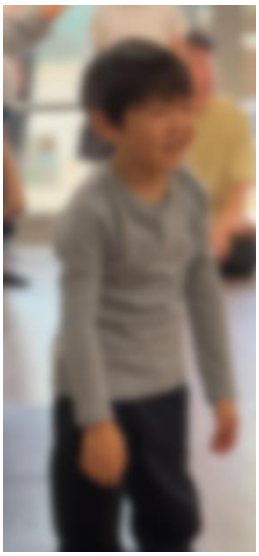
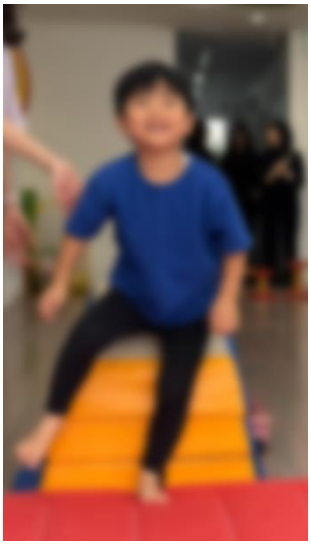
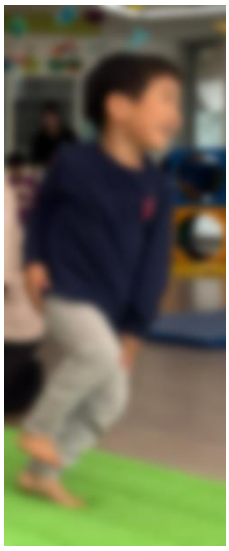
し喜ぶことができる生き物です。昨日まで出来なかったことが今日、初めて出来るようになった。他人との比較や勝敗の結果ではない、自分の中に起きたその変化だけでも十分幸せを感じることができるものだと、私は考えています。

●運動面についても然りです。例えば跳び箱を例に取ります。らんらんになり、年上の子が軽々と６段の跳び箱を跳ぶ姿を目にし、憧れ、自分も跳んでみたいと思う。初めは全然跳び方も分からず、体も思い通りに動かない。だから低い段からチャレンジしてみる。保育者から褒められ、励まされ、何度も何度も繰り返していく。するといつしかコツを掴み、形が出来てくる。そこに年齢に応じた身体発達の後押しがあり、より高い段数の跳び箱が跳べるようになるのです。自分が跳びたいと思った段数の跳び箱を跳べた時の子どもの表情といったら――。皆自信と達成感に満ちた、えも言われぬ良い顔をしています。



●そこには他人と比べ競い合うという観点は介在しません。唯一比べる対象といえば、過去の自分自身です。あくまで自分軸で成長を判定し、喜んでいるのです。この自分軸、自律的な成長サイクルを幼少期のうちに体得できればしめたものです。他人からの評価や称賛に依存せずに培われた自己効力感(「やれる気しかしない」という楽観的見通し)は、そう簡単には折れません。それゆえに幼児期の段階では、運動面についても他人の目を気にすることなく楽しく伸び伸びと成長していって欲しいと考えているのです。

●こうした力は日々保育園の中で育っていますが、園の活動では唯一補えないものがあります。それが、「保護者様からの応援や温かい眼差し」です。これが子どもの“大切な人に自分の『出来た！』を見てほしい”という思いと結び付くことで、自己肯定感を推進する大きな力となります。保育園行事の価値は、そこにあるのだと私は思います。

●ここで誤解のないように申し上げておきますと、ミル保育園は他人と競うことや勝ちへのこだわりによって子どもが獲得できるものを軽視しているわけではありません。競争や勝敗を前提としたチームとしての団結力が、幼児期といえども

子どもの心の成長に役立つ面は確かにあり、それ自体大事なことだと考えています。しかし、まだ運動経験が十分に足りていない段階の子どもに対して優勝劣敗が過度に強調されることで、運動自体に苦手意識を持ち、その後の人生においても人前で運動することを恥ずかしがったり、運動嫌いになってしまう子どもが発生してしまうことは、極めてもったいないと思うのです。

●他者との競争や勝敗を決することが本当の意味で子どもの糧になるためには、その頑張る対象のことを本人が好きであったり得意であることが大前提にあるべきだと思います。だからこそミル保育園では、一人ひとりの子どもの好きなこと・得意なことを見つけ、その領域を広げることにこだわっています。

陰徳を積む

●さて、話は変わります。前回のお便りでイエローハットの創業者鍵山秀三郎さんの著書「凡事徹底」に触れ、その前段で、職場のトイレの洗面台を人知れずせっせと拭き上げていた私の先輩のエピソードをお伝えしました。その件に関して、個人的に不思議なシンクロニシティを経験しましたので紹介させてください。前回お便りを発行したのが10月1日。その 1 週間後の10月8日に配信された、元政治家の方の以下のような facebook 投稿を偶然目にしたのです。

【麻生太郎さんの真の育ちの良さについて】

それを見せつけられたのは国会内のトイレの中だ。

国会内でトイレに入るとなんと麻生さんが先に用を済まされ、手を洗っておられる。深くお辞儀をしながら用を足す。
「田村先生、お元気ですか」と会釈されトイレを出られていた。
用を足して手を洗おうと洗面台に近づくとなんと洗面台のボウルもその全体もピカピカに磨かれ乾いている。
そう。麻生さんは手を洗われた後、手を拭いた後その紙で飛び散った水を自分が使ったボウルだけでなく、洗面台全体をきれいに拭かれ、ピカピッカにして出て行かれるのだ。
それは国会の中だけでなく、飛行機の中でも新幹線の中でもレストランでもそうなのだ。あっという間にきれいに拭かれているのだ。
無神経極まりない日本の政治家が使ったトイレや洗面台は悲惨な状態になって放置されている場合も少なくないが、麻生さんが出てきた後のトイレのきれいなこと。
自分では絶対このことは吹聴されない。
一度お会いした時にそのことを話すとあの笑顔で「ははは」とされるばかり。
（以上「田村こうたろう」氏の投稿から引用）

●なんと、あの麻生太郎さんも私の先輩と同じ善行を積み重ねているというではありませんか。その内容もさることながら、同じような内容をほぼ同じ時期に発信されている方がいるという偶然に、私は非常に驚きました。

●麻生さんと私の先輩、お二人の行動に共通していて私が素晴らしいなと思う点は、自分が使った洗面台以外も全部綺麗に拭き上げていることと、そのことを誰にも吹聴していないという2点です。
●このお二人のエピソードに触れて改めて心に思い浮かん

だのが、安岡正篤氏（哲学家・陽明学者）が遺した「身心摂養法～多忙な中でも心身を溌剌と保つための 3 つの実践法～」です。

一　心中常に喜神を含む
（どんなに苦しい状況に置かれても、心の中に喜びの気持ちを常に持ち続けよう）
二　心中絶えず感謝の念を含む
（常に感謝の気持ちを忘れないようにしよう）
三　常に陰徳を志す
（人に知られないように、陰で善い行いを積むことを心がけよう）

●人知れず公共のトイレの洗面所をピカピカに拭き上げるという行為は上記三に該当しますが、このお二人はまさしく上記全てを実践されているように推察します。

●この実践法、言うは易し行うは難しです。特に「多忙な中でも」という点がミソなのですが、今回体験した不思議なシンクロニシティを戒めに、私も秘かに頑張っていきたいと思います。

追伸①：安岡正篤氏（1898～1983）は昭和時代の思想家であり哲学者であり、私が最も尊敬する方のうちの一人です。若くして漢学に通じ、戦後の歴代総理の指南役を務め、「昭和最大の日本の黒幕」とまで評されました。類稀なる秀才でありながら政財界などの表舞台には一切出て来ず、ひたすら戦後日本の復興に向けて実践を積まれた知行合一の人でした。

追伸②「徳を積む」と言って思い出されるのが、ドラマ「ブラッシュアップ・ライフ」です。前世で積み上げた徳の質量によって次に生まれ変わる生物の種類が決定されると知った主人公が、再び人間に生まれ変わろうと何度も自分の人生をやり直しながら徳を積むという、ファンタジーな内容でした。バカリズムさん脚本ということもあり、あまりに面白く、家族で何度も観て笑い転げていました。

園長　橋本　英明